日刊ゲンダイ　2012年（平成24年）12月5日（4日発行）

医者も知らない平穏死

連載⑨
〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穏死』10の条件」など。

がん性腹膜炎だって最期まで食べられる

先日、末期がんの在宅患者さんが数人、相次いで亡くなられ、死亡診断書を書かせていただきました。皆さん、亡くなる直前まで食事をされていました。こういう話を病院の先生に言うと、「そんなことあるわけないやろ」と一蹴されます。まったく信じてもらえないのです。

私のブログの読者の方から「末期がんの場合、最期まで食べるのは無理、と聞きましたが、本当ですか？」という質問をいただきました。

胃がんや大腸がんなど消化器系のがんは、最終的にがんがお腹の中いっぱいに広がり、小腸や大腸が癒着し、蠕動（ぜんどう）運動ができなくなります。「がん性腹膜炎」と呼ばれる状態です。

「がん性腹膜炎になると食べられない。食べると腸閉塞を起こして危険」というのが、医者の常識。高カロリー輸液で栄養補給をします。そして、腸閉塞を防ぐために鼻から管を入れて腸の内容液を排出します。私も勤務医時代は、何の疑いもなくやっていました。

（写真はイメージ）

ところが、在宅医療を始めて気付きました。高カロリー輸液をするから腸閉塞になるんやん！

蠕動運動がうまくできないところに、高カロリー輸液によって水分をたくさん入れると、腸管の粘膜がむくんで、腸の働きが一層悪くなります。腸管の中に貯留する腸液量も増え、逆流し、患者さんは嘔吐を繰り返すことになるのです。

このことに気付いてから、私はがん性腹膜炎の患者さんに、輸液をあまり行わなくなりました。たとえ行うときでも、ごく少量。すると、腸管はむくまず、腸管の内溶液もほとんどたまらないので、嘔吐しません。すると、腸管は少しずつですが動くので、最期まで食べられるのです。プリンを食べた10分後に亡くなられた患者さんもいました。

もちろん、がん性腹膜炎の癒着の程度によって、個人差があります。しかし、「がん性腹膜炎は食べられない」と一概に考えるのは、間違えていると思うのです。